
いじめ脱出マニュアル

ぶっとび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いじめ脱出マニュアル

【Nコード】

N5538BA

【作者名】

ぶつとび

【あらすじ】

山本孝樹、二二歳。自分は中学校入学した初日から、中学校三年生まで、同級生のヤンキー達にいじめられていました。とにかく残酷で、生き地獄のような日々を送っていた自分の人生を、劇的に変化させてくれた元ヤンの、八神光誠先生。八神先生は自分に、パーセント絶対にいじめから抜け出せる方法を教えてくれました。それは「自分自身がいじめられないくらい、強くなる」というものです。

僕がいじめに勝利するまでの、真実の記録。

八神先生

いじめは克服できます。そしていじめを克服すると自分の人生において、かなりの経験値となりまた、自分への自信にもなります。ここには自分が中学三年生の九月三日から、忘れもない一月一日水曜日までの、いじめに勝利するまでを書いたノンフィクションの記録です。これはいじめられっ子達に、きつと役に立つと思います。

八神先生との出会い

自分は兵庫県出身です。当時の自分は背が低く、性格も暗くて友達もいませんでした。しかしたまにちよっかいをかけられる事はあっても、いじめられる事は無く、自分は小学校を無事卒業しました。しかし自分が入学する中学校は、ヤンキーが多い事で知られ、同級生にも男女合わせて三 名程のヤンキーがいました。すると入学初日から、僕はいじめのターゲットになってしまいました。理由は、ただ背が低いということだけ。周りも見てもみぬふりで、教師さえも、ヤンキーの凶暴さに及び腰になりやはり見てみぬふりでした。想像を絶するいじめに三度、自分は自殺を考えましたが死ぬ勇気が無く、失敗していました。しかし、それももう限界に来ていた時、自分の中学に新しい教師がやって来るのです。

二 六年九月三日月曜日

全校集会のため生徒が体育館に集まり、先生達の色々な話しを聞いていました。しかし体育館にヤンキー達の姿はありません。自分は多分まだ登校してないか、登校していたとしても、どこかでサボってるのだと思っていました。校長先生の話しが終わると、三年

の学年主任が新しい先生が赴任してきたと言い出した。

「今日から、新しく赴任してきた先生がいます」

そう言うと、一八 後半の長身にスーパーモデル顔負けの容姿を持つ男が、ステージに上がってきました。

「今日から赴任してきた、八神先生です」

ピシツとした黒のスーツに白のシャツ、ネクタイにベストを来ている八神先生は、教師と思えない外見をしている。爽やかな雰囲気、髪はほんの少し茶色に染まって短髪、恵まれた外見の持つ先生だ。

八神先生はマイクの前に立ち、あいさつを始めた。

「初めまして、新しくここに赴任した社会科の八神光誠です。え、前は 中学校にいました。俺のスタイルはやるとこやって、抜くとこ抜いてっていう感じなんで、やるとこやって、抜くとこ抜いて、ピシツとやりましょ！よろしくお願いします」

「なお八神先生には、退職した三年二組の担任だった、〇〇先生に変わって二組の担任を努めてもらいます」

自分のクラスである。自分は、あのイケメン教師がヤンキーにどうびびるかと思像し、楽しみにしていた。しかし自分が、八神先生は他の先生と何かが違うと気付いたのはそれからすぐの事であった。始業式が終わって、それぞれが教室に戻った。自分のクラスには男七人、女九人のヤンキーがいて、教室に戻ると男女三人のヤンキーが登校していた。自分は出来るだけいじめられなくなかったので、見つからないように授業ぎりぎりまでトイレにこもっていた。そして時間が来てトイレの入り口前に行くと、前を八神先生が歩いて横切った。自分は何故か分からないが隠れてしまい、そして様子を伺ってみた。すると、先生の横をヤンキーの二人組が通りかかり、ヤンキーは初めてみる顔に興味津々になり先生を睨む。先生も二人組を見つめていると、ヤンキーの一人が口を開いた。

「お前何じろじろ見とんねん？」 続けてもう一人が。

「殺すぞお前！」

そう言われた八神先生は立ち止まり、二人の方に真顔でゆつくりと近づいていき、目の前まで来た先生は「口の聞き方に気をつけろ」と言いながら、右の奴を左フックで失神させ、物凄いスピードの前蹴りを、右の奴の腹に打ち込んだ。蹴られた奴バランスを崩しながら後ろに後退し、五メートル程行ったところでこけて、後頭部を強打していた。

「なめんなーゆうねん」

先生は二人にそう言うと、教室に向かった。孝樹が隙を伺って先に教室に着いてすぐに、先生が入って来た。そして黒板の前に立った。

「はい、静かにしてー」

徐々に静かになり、一回で静かになったと思ったらヤンキーの一人、江崎祐介が先生を挑発する。

「え？てか、お前誰やねん？」

すると後ろの席の藤堂尚也が、上で手を叩きながら連呼しだした。

「帰れ！帰れ！帰れ！帰れ！」

すると祐介ともう一人、長野龍也も一緒に三人で連呼しだした。すると先生が口を開く。

「静かにしろーゆうとんねん」

やめない三人。尚也は踊りだすと、先生は出席簿を投げつけた。びつくりした尚也はぎりぎりのところで払いのけた。

「何じゃおらあー！！」

怒鳴る尚也に先生は冷静に返す。

「何じゃちゃうねん、静かにしろってゆってんねん」

「黙れや！殺すぞ！」

更に言い返すと、先生は先程と明らかに違うトーンで、

「お前殺すぞって、誰に口聞いてんねん、この出来損ない」。

威圧感のあるトーンに少し萎縮した尚也は小さな声で「はっ？」、としか返せなかった。

「いや、はあ？ちゃうがな。誰に口聞いとんねん、って言ってんね」
先生は尚也に近づき、そして胸ぐらを掴みこう言った。

「お前、俺に対してもしまったそんな口の聞き方してみい、ただじゃ
すまさんぞ？わかってんのか？」 うなずく尚也。そして先生は尚
也を突き放して黒板へ向うと、尚也が、

「暴力反対ー！！」と叫んだ。

「やかましあわっ！ぼけーっ！！」

間髪を入れず先生が叫ぶと、先生は尚也にフルスイングの張り
手を食らわせた。すると祐介が口を開く。

「傷害で訴えたるからな！！」

すると次は祐介の胸ぐらを掴み口を開く。

「おっつ、訴えてみいや、でももし訴えて俺がクビにでもなってみ
い、お前二度と立たれへんよおなんぞ？それでも良かったら訴え
たらええがな」

そして祐介の顔を手で掴んで、後ろに投げ飛ばした。祐介は机
にぶつかりしりもちをついた。すると八神先生が続けた。

「大体何やねん、警察に訴えるつて。お前らただのヘタレやんけ、
そんなんでよお俺はヤンキーや！とか語れんな。聞いているこつちが
恥ずかしなるわ」

そして、先生はヤンキー以外の生徒に対して口を開いた。

「あれやで、みんなもこんなヘタレにビビったらあかんで？こいつ
らただのヤンキーの出来損ないやから。みんなでバチバチいったた
らええねん」

何も言い返せない三人。この先生はヤンキーを圧倒した。これ
を見た生徒が呆然とする中、自分がかすかな希望が芽生えた。

「この先生なら、いじめを解決してくれるかもしれない」、と。

しかし自分が入学する中学校は、ヤンキーが多い事で知られ、同級
生にも男女合わせて三 名程のヤンキーがいました。すると、入学
初日から僕はいじめのターゲットになってしまいました。理由は、

ただ背が低いということだけ。周りも見てみぬふりで教師さえも、ヤンキーの凶暴さに及び腰になりやはり見てみぬふりでした。想像を絶するいじめに三度、自分は自殺を考えましたが死ぬ勇気が無く、失敗していました。しかし、それももう限界に来ていた時、自分の中学に新しい教師がやって来るのです。

二 六年九月三日月曜日

全校集会のため生徒が体育館に集まり、先生達の色々な話しを聞いていました。しかし体育館にヤンキー達の姿はありません。自分は多分まだ登校してないか、登校していたとしても、どこかでサボってるんだと思っていました。校長先生の話しが終わると、三年の学年主任が新しい先生が赴任してきたと言い出した。

「今日から、新しく赴任してきた先生がいます」

そう言うと、一八 後半の長身にスーパードモデル顔負けの容姿を持つ男が、ステージに上がってきました。

「今日から赴任してきた、八神先生です」

ピシッとした黒のスーツに白のシャツ、ネクタイにベストを来ている八神先生は、教師と思えない外見をしている。爽やかな雰囲気、髪ほんの少し茶色に染まって短髪、恵まれた外見の持つ先生だ。八神先生はマイクの前に立ち、あいさつを始めた。

「初めまして、新しくここに赴任した社会科の八神光誠です。え、前は 中学にいました。俺のスタイルは、やるとこやって、抜くとこ抜いてっていう感じなんで、やるとこやって、抜くとこ抜いて、ピシッとやりましょ！よろしくお願いします」

「なお八神先生には、退職した三年二組の担任だった、〇〇先生に変わって二組の担任を努めてもらいます」

自分のクラスである。自分は、あのイケメン教師がヤンキーにどうびびるかと想像し、楽しみにしていた。しかし自分が、八神先生は他の先生と何かが違うと気付いたのはそれからすぐの事であっ

た。始業式が終わって、それぞれが教室に戻った。自分のクラスには男七人、女九人のヤンキーがいて、教室に戻ると男女三人のヤンキーが登校していた。自分は出来るだけいじめられなくなかったので、見つからないように授業ぎりぎりまでトイレにこもっていた。そして時間が来てトイレの入り口前に行くと、前を八神先生が歩いて横切った。自分は何故か分からないが隠れてしまい、そして様子を伺ってみた。すると先生の横をヤンキーの二人組が通りかかり、ヤンキーは初めてみる顔に興味津々となり先生を睨む。先生も二人組を見つめていると、ヤンキーの一人が口を開いた。

「お前何じろじろ見とんねん？」　続けてもう一人が。

「殺すぞお前！」

そう言われた八神先生は立ち止まり、二人の方に真顔でゆつくりと近づいていった。目の前まで来て先生は「口の聞き方に気をつけろ」と言いながら、右の奴を左フックで失神させ、物凄いスピードの前蹴りを、右の奴の腹に打ち込んだ。蹴られた奴バランスを崩しながら後ろに後退し、五メートル程行ったところでこけて、後頭部を強打していた。

「なめんなーゆうねん」

先生は二人にそう言うと、教室に向かった。孝樹が隙を伺って先に教室に着いてすぐに、先生が入って来た。そして黒板の前に立った。

「はい、静かにしてー」

徐々に静かになり、一回で静かになったと思ったらヤンキーの一人、江崎祐介が先生を挑発する。

「え？てか、お前誰やねん？」

すると後ろの席の藤堂尚也が、上で手を叩きながら連呼しだした。

「帰れ！帰れ！帰れ！帰れ！」

すると祐介ともう一人、長野龍也も一緒に、三人で連呼しだした。すると先生が口を開く。

「静かにしろーゆうとんねん」

やめない三人。尚也は踊りだすと先生は、出席簿を投げつけた。びっくりした尚也はぎりぎりひきかきで払いのけた。

「何じゃおらあー!!」

怒鳴る尚也に先生は冷静に返す。

「何じゃちゃうねん、静かにしろってゆってんねん」

「黙れや！殺すぞー！」

更に言い返すと、先生は先程と明らかに違うトーンで、

「お前殺すぞって、誰に口聞いてんねん、この出来損ない」。

威圧感のあるトーンに少し萎縮した尚也は小さな声で、「はっ

？」としか返せなかった。

「いや、はあ？ちゃうがな。誰に口聞いとんねん、って言うてんね」

先生は尚也に近づき、そして胸ぐらを掴みこう言った。

「お前、俺に対してもし今度そんな口の聞き方してみい、ただじゃすまさんぞ？わかってんのか？」 うなずく尚也。そして先生は尚也を突き放して黒板へ向うと、尚也が、

「暴力反対ー!!」と叫んだ。

「やかましあわっ！ぼけーっ!!」

間髪を入れず先生が叫ぶと、先生は尚也にフルスイングの張り手を食らわせた。すると祐介が口を開く。

「傷害で訴えたるからな!!」

すると次は祐介の胸ぐらを掴み口を開く。

「おっつ、訴えてみいや、でももし訴えて俺がクビにでもなつてみい、お前二度と立たれへんよおなんぞ？それでも良かったら訴えたらええがな」

そして祐介の顔を手で掴んで、後ろに投げ飛ばした。祐介は机にぶつかりしりもちをついた。すると八神先生が続けた。

「大体何やねん、警察に訴えるって。お前らただのヘタレやんけ。そんなんでよお、俺はヤンキーや！とか語れんな。聞いてることちが恥ずかしなるわ」

そして、先生はヤンキー以外に対して口を開いた。

「あれやで、みんなもこんなヘタレにビビったらあかんで？こいつらただのヤンキーの出来損ないやから。みんなでバチバチいったたらええねん」

何も言い返せない三人。この先生はヤンキーを圧倒した。これを見た生徒が呆然とする中、自分がかすかな希望が芽生えた。

「この先生なら、いじめを解決してくれるかもしれない」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538ba/>

いじめ脱出マニュアル

2012年1月15日02時53分発行